
魔法のほうき星

星野るな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法のほうき星

【Nコード】

N7812Z

【作者名】

星野るな

【あらすじ】

『大切な話があるから、来てほしい』

クリスマススイブの夜、クラスメイトの速水真人から電話で呼び出しを受けた楠未来。告白の予感に期待と不安を膨らませて速水との待ち合わせの場所に向かう。

そこで早川から聞かされた、意外な事実とは？

クリスマスを舞台に始まる未来の大冒険、果たして奇跡は起こるのか？

Scene 1

『大切な話があるから、来てほしい』

クラスメイトの速水真人から電話があったのは12月24日――クリスマスイブの午後8時過ぎだった。

長めの風呂からあがり、ぼんやりとクリスマス特番の恋愛ドラマを『他人事』と決め込んで見ていた未来にとってその電話は、まさに想定外の出来事であった。

速水とは同じクラスであったが、とりたてて仲がいいというわけではなく、新学期から数えても、言葉を交わし合った回数は一桁といても過言ではない。

完全に意表を突かれた人物からの電話に、未来は戸惑いをあらわに対応する。

「こんな時間に話って、いったい……」

「電話では、ちよつと言えない話なんだ」

明らかに緊張を含んだ口調であった。

重大な決意に満ちたような速水の声に、未来は困惑する。

――ひよつとして、これって……

たった今まで他人事だと思っていた、クリスマスの『告白』のイベント？

そう思った瞬間、鼓動が一オクターブほど跳ね上がった。

「だって、こんな時間から出て来いって言われても困るよ。明日じゃ駄目なの？」

「今夜じゃなきゃ駄目なんだ、絶対に」

勤めて平然を装い、相手の真意を探ろうとする未来に、速水はこれ以上に無いくらい真剣に答えた。

「私じゃなきゃ駄目なの？」

「ああ、お前じゃなきゃ何の意味もない」

半信半疑だった疑問が、音を立てるように現実味を帯びて行くと同時に、初めて体験する緊張が身体を支配する。

「で、でもそんなこと急に言われても……」

「今、駅前にいるんだ。ほら、ロータリーのところにツリーがあるだろ」

「う、うん……」

「そのツリーの下で待ってるから、今すぐ来てくれ、今すぐだぞ」
「ちょ、ちょっと、そんな一方的に言われても……」

「ずっと待ってるから!」

未来の動揺を受話器から感じ取ったのか、速水は矢継ぎ早に言葉を続けると、有無を言わさぬように通話を切った。

「何なの? いったい……」

一方的に回線を遮断された未来は、通信が途切れた携帯を眺めながら、今しがた起こった一連の出来事を整理しようとした。

これまでの僅かな人生の中で恋愛――ましてや告白された経験など無い未来は、この状況にどう対処すればいいのか、皆目見当がつかなかった。

ただぼんやりと声の途絶えた携帯を眺める未来に、ふと一つの疑問が湧きあがった。

「あれ……」

どうして速水は自分の携帯番号を知っていたのだろうか?

間違い無く自分からは教えたという事実が無い。だとしたら、誰かに教えてもらったことになるのだが……いったい誰に?

未来は大きく息を吐き出すと、意を決したように覚悟を決めた。

「確かめなきゃ……」

携帯番号の謎解き、電話をかけてきたクラスメイトの目的……どちらへの眩きかは自分でもよくわからなかったが、今から何をすべきかははっきりと見えていた。

Scene 2

未来の家から速水が待っているであろう駅までは歩いて約5分——パジャマから着替えて、コンビニに行くと言って家を出た未来は、急ぎ足で箕面駅を目指していた。

通学のために通るいつもの道が、今夜はどことなく別世界の風景に見える。

箕面川を横手に見ながら坂を下り、小さな橋を渡る。

朝の通学時には時折、川面にいる白鷺を見るのが未来の楽しみでもあったのだが、そんな余裕もなく急ぎ足で橋を渡ると、自転車しか通れない裏道を抜け、箕面駅にたどり着いた。

真っ白な光に浮かぶホームを見ながら、改札の前を横切っていくと駅前のロータリーに出る。

寂れた温泉地のために、この時間になるとあまり人気は無く、タクシーが数台、次の電車で下りてくるであろう乗客を待っているだけだった。

未来は線路と平行するようにロータリーを歩くと、コンビニ前にある広場のツリーに向かう。

——でも……

もし、これが告白のための呼び出しだったとしたら、自分はどうすればいいのだろうか？

速水のことは嫌いでは無かった。クラスではあまり目立たない存在であったが、顔は未来の好みに近く、背も結構高くて、どちらかというと男子の中でもかっこいいと言われる部類の入るのかもしれない。

女子からもそこそ人気があつて、未来の友達のひとりが密かに恋心を抱いているのも知っていた。

だが、自分自身はと問われると——答えを見つけることが難しかった。

彼と交わされた数少ない会話の中では、本当に他愛の無い話しかしていなかったし、それ以上にお互いが深いところに踏み込むことも無かった。

いつも自分の話を聞くときは、小さな笑みで聞いてくれていたことに、どこことなく好印象は抱いていたのだが……

ツリーの青白いイルミネーションが近づくにつれて、緊張で体が強張ってくる。

宙に足が浮いているような不思議な感覚だった。

——どうしよう……

未来的には、速水がいないほうが気が楽であった。

何かの間違いだったと笑い飛ばせばいい。コンビニで温かい飲み物でも買って帰れば、親にも必要な嘘をつかなくても済む。

でも、それはそれで寂しいような、複雑な心境であったが……

——まあ、なるようしかない、出たところ勝負ね。

未来がそう覚悟を決めた直後、ツリーの下でイルミネーションを見上げている速水の姿を見つけた。

速水は未来を見つけると、軽く手を上げて小さく微笑んだ。

「やあ、本当に来てくれたんだ」

「だって、あんなふうに電話切るんだもん、私が行かなきゃ、ずっと待ってるんじゃないかって思ってた……」

「ずっと待ってるつもりだったよ、もちろん」

抗議の瞳を向ける未来にお構いなくといったふうに、微塵の疑いも無く言った。

「はあ、そうですか……」

「ひょっとして、今夜予定があったの？ 彼氏とデートとか……」
「そんなのあるわけないよ！」

速水の言葉が終わらぬうちに、未来は即座に首を振り否定した。
慌てふためく少女を見て、速水は安堵に胸をなでおろす。

「なら、良かった」

「どうして？」

「人の恋路を邪魔をする趣味は、あいにくと持ち合わせていないもので……」

そう言うとき速水は悪戯っぽく笑ってみせた。

巧妙なりサーチに引っ掛かってしまったと未来は内心、舌打ちをする。

「それで、速水君の大切な用事って何なの？」

掴みどころがない速水の態度に煮え切らないというように、未来は少し不機嫌そうに問いかけた。

どうも自分が描いていた告白のイメージと違うことに、戸惑いと苛立ちを感じていたのかもしれない。

少女の質問が声が耳に届くと同時に、速水は表情を引き締め、真剣味を帯びた眼差しで未来を見つめる。

「どうしても話しておきたい大事なことがあって、それでお前を呼び出したんだ」

「だから、その大事なことって？」

「実は、俺……」

答えを求める未来に、速水はそつと顔を近付けた。

未来は緊張に息を飲むと、速水の口から発せられる次の言葉を待った。

心臓がバクバクと波打っているのが、自分でも嫌というほど自覚できる。

足がガクガクと震えて、立っているのがやっとだった……

そんな未来にお構いなくと言ったように、速水はまっすぐに未来の瞳を覗き込むと、ゆっくりと運命の言葉を口にした。

「死んでるんだ」

「えっ？」

一瞬、何かの聞き間違いかと思った未来が、思わず間の抜けた声を上げる。

そんな未来に、速水はさらに真剣な表情で、もう一度補足するように繰り返した。

「俺はもう死んでる。いや、正確に言うと、今夜中に死ぬ……」
想像を遥かに超える速水の発言内容に、少女の頭は混乱する。

「ちょっと、何言ってるの？　こんなところに呼び出しといって、冗談はやめてよね！」

自分がからかわれたのだと思った未来は、湧き上がる怒りを隠すこともせずに相手にぶつけた。

「何これ、ドッキリの企画？　みんなして私をからかおうっていうのね。それで携帯の番号知ってたんだ。バカみたい、ずっと待ってるっていうから心配して来たのに……私、帰るね！」

恥ずかしさと悔しさに涙が出そうなのを堪えようと、未来は速水に踵を返そうとする。

「いいから良く聞いて！」

未来の反応を予想していたように、速水が背中越しに叫んだ。

あまりにも真剣で切迫した速水の声に思わず動きを止める。

「これが悪い冗談だったら、どんなに良かったか……」

振り向いた未来に、うなだれたように溜息をつく速水は続けた。

「今から一時間ほど前、江坂で大きな事故があった。列車が脱線して高速道路の高架に激突したんだ……」

「……………」

「何両かの車両は原型がわからないくらいグシャグシャ……死傷者もたくさん、最終的には100人以上の人が命を落とす」

まるで目の前でその事故が起こっているかのように、速水は悲痛な面持ちでその様子を語った。

「それと速水君がどう関係あるの？」

何故、そんな話題を口に行っているのかを理解できずに質問した未来に、速水は冷静に……はつきりと結論を述べた。

「俺もその電車に乗ってた」

「乗ってたって……だって速水君、ここにいるじゃない？」

「本当の俺の身体は今、緊急病院のICUにいる。今、急患チームが必死になって蘇生を試みてる最中だけど、もう助からない」

話が全く見えていない未来に、速水はまるで他人事のように続ける。

「大腿骨、肋骨の骨折、全身打撲に脳挫傷……でも、最終的な死亡原因は出血性のショックかな。どのみちもう明日を迎えることはできない」

「で、でも……それじゃあ、目の前にいる速水君は何なの？ 幽霊ってこと？ 足だってちゃんとあるし……」

「幽霊に足が無いのは日本だけだよ。外国の映画をってみろ？ ちゃんと足があるだろ」

速水自身としては深刻な状況を説明しているつもりであったが、未来の受け答えがあまりにもズレていたので、少し呆れたように説明を付け加えた。

「た、確かにそうだけど……」

「それに俺はまだ幽霊じゃない」

「じゃあ何なの？」

納得がいけないと疑問の瞳を向ける少女に、速水はゆっくりと答えた。

「生霊だ」

「生霊？」

「死ぬ間際の人間から魂だけが抜けだす現象さ。古くは源氏物語なんかにも出てくるし、上田秋成の雨月物語なんかでも有名かな。とにかく俺の本当の身体は病院のベッドの上で、ここにはいない」

「よくわからないけど、何となくわかった……」

どこまで理解しているか自分でも怪しかったが、目の前にいるクラスメイトが、偽りごとを言っていないことだけは信じてもいいような気がした。

「え？ でも、それじゃあ……」

速水の話が本当なら、導き出される答えは一つだった。

「速水君、今夜で死んじゃうの？」

「ああ、このまま時間が過ぎれば、間違いなく俺は死ぬ……」

『正解』というように、速水が頷いてみせた。

「そ、そんなの困る、駄目だよ死んじゃ……」

未来は慌てふためくと、思いつくままの気持ちを言葉にした。

「俺だってまだ死にたくはない、やりたいことだってたくさんある……」

「どうにかできないの？」

「俺も力ではもう、どうすることもできない……」

祈るような未来の瞳に、速水は力なく首を振った。

「そんな……」

未来は愕然と声を絞り出す。

今日の前で話しているクラスメイトが、明日にはいなくなってしまおうと思うと頭が真っ白になった。全身の力が抜けたようになり、立っているのがやっとの状態だった。

「そんな悲しい顔するなよ」

「だって……」

「まだ話は終わってねーよ。俺だってこの若さで死ぬなんて、まっぴらごめんだ」

「でも、どうすることもできないって言ってたじゃない」

「確かに俺一人ではどうすることもできないけど……」

速水が未来の瞳をまっすぐに覗きこむと、真剣な表情で言った。

「楠、お前が力を貸してくれたら話は別だ」

「私の力……？」

確かめるような未来の視線に頷くと、速水は続ける。

「お前が協力してくれたら、奇跡が起こせるかもしれない」

「奇跡が起こったらどうなるの？」

「俺は死なずに済む」

「本当？」

「ああ、本当だ」

未来の瞳に希望の光が灯ると、子供のように表情を輝かせた。

「じゃあその奇跡を起こしましょ！ 私にできることは何でもす

るから」

「ありがたい……そう言ってくれなきゃ、どうしようって思ってたんだ」

張りつめた緊張から解放されたように、速水が大きく息を吐き出した。

「当たり前でしょ？ クラスメイトの危機なんだから。そんな薄情な女に見えた？」

「いや、こんな話、俺だったら間違いなく信じないから……」

「私は信じるわ、だって速水君嘘ついているように見えないし、本当に困ってそうだもん」

「困ってるレベルを遥かに超えてるんだけどな……でも助かるよ、ありがとう」

「それで、私は何をすればいいの？」

「あまり時間が無い……一緒に来てくれるか？ 説明は途中でするから」

善は急げとばかりに、速水は駅の入り口に向かって歩き出そうとする。

「一緒について、どこに行くつもり？」

振り返った速水が、駅の向こうに広がる大きな山を指さした。

その方向には大きな観光ホテルと、ホテルと滝道を繋ぐ青いネオンのエレベーターが見えた。

「箕面温泉スパーガーデン？」

「こんな時にのんきに温泉につかってどうするんだ？ その向こう……六個山だよ」

Scene 3

速水が目指す六個山は、滝道の途中にある山道を登りきったところにある。駅からだと歩いて小一時間といったところだろうか。

滝道はハイキングコースになっていて、最終的には観光名所でもある『箕面の滝』に続いているのだが、分岐した道を歩いて行くこと箕面山の山頂や、隣の池田市にある五月山にも行くことができる。

ハイキングコースの一つでもある六個山の山頂には小さな展望台があり、大阪が一望できる絶景ポイントもあった。

未来自身はまだ行ったことは無かったが、展望台からの画像をネットで見ることがある。

家が滝道に近いせいもあって、休みの日の朝にはよく滝道を散歩していたので、いつか行ってみたいとは思っていたが、まさかこんな形で行くことになるとは思わなかった。

速水に続いてロータリーを戻り、駅を通り越して滝道へと足を踏み入れると、見慣れたいつもの土産屋、酒店が並んでいる。

夜のせいもあって殆どの店が閉まっていたが、緑のテントの梅原酒店だけは明かりが灯り、数名の客がテーブルに酒を並べて賑やかにやっていた。

いわゆる立ち飲みであった。かなり平均年齢の高そうなグループがコップを片手に、店内の上の方にあるテレビを見ていた。

何気にそのテレビに目をやった未来であったが、次の瞬間、驚きに目を見開くとテレビの画面に視線を釘づけにする。

「ね、ねえ、あれって……」

画面の中では速水の説明通りに、いびつに折れ曲がった電車の車両が線路上に横たわっていた。

現場は警察官、報道陣といった大勢の人で騒然としていて、オレンジの服を着たレスキュー隊員が今まさに、電車のドアを焼き切ろうとしているところだった。

「事故現場だ、まだ救出作業が続いているみたいだな。俺が乗っていたのは、あれの後ろの車両だ、ほら画面の端っこに映ってるだろ？」

速水はテレビの画面を見上げたまま、自らが巻き込まれていた車両を指さした。

「ホントだったんだ……」

未来は息を飲み込むように、ぽつりと呟いた。

「何だよ、信じてなかったのかよ？」

「そうじゃないけど……」

実際に現場を目にしたことで脱線事故、病院で死を待つ速水の話がよりいっそう現実味を増したのだ。

それと同時に、自分が非日常の世界に足を踏み入れてしまったことを実感する。

でも、それがかえって幸いしたのか……未来の中にあった不安や迷いが一掃される。

未来は事故現場の映像から視線を外し、すうっと息をのみ込むと、生気に満ちた表情で速水を促した。

「さ、行きましょ」

「ああ……」

不意に遅しくなった少女に戸惑いをあらわにするが、未来は構わずに速水の手を取り、酒屋をあとにしようとした。

が、繋いだ速水の手を見た瞬間に表情を凍りつく。

「は、速水君……」

速水の手が透け、繋いでいる未来自身の手のひらが見えていたのだ。

「だいぶん本体の方が弱ってきてるみたいだな」

「た、大変……急がなきゃ！」

他人事のように振る舞う速水の手を引くと、未来は滝道の奥に向かって走り出す。

「ちょ、ちょっと楠、待てよ」

「待たないよ、だって急がないと、速水君が完全に消えちゃうよ」
「大丈夫、そんなに急がなくても、すぐには消えはしない」

速水の声を見失ってぐいぐい先を急ぐが、商店街を超え、観光ホテルのエレベーター付近まで来たところで、息が上がって足が止まってしまう。

肩で激しく呼吸している未来に、少し呆れたように速水が声をかける。

「そんなペースで走ったら、六個山まで持たねーよ」

「でも、でも……」

息を切らしながらも、未来は気持ちを必死に言葉にしようとする。悲壮感を浮かべる未来に落ち付けと言わんばかりに、速水は穏やかに声をかけた。

「ありがとうな、心配してくれて」

「……………」

予期しなかった優しい言葉に、未来は思わず涙腺が緩みそうになった。それを悟られないように視線を落とすと、呼吸を整えるふりをする。

「俺の方は大丈夫だ、本体の方が頑張ってくれてるから」

「本当？」

「嘘じゃない……自分の体のことは自分が一番よくわかる」

上目遣いで問う未来に、速水が安心させるように答えた。

その言葉に未来は安堵する。

お互いに小さく笑い合うと、ふと気付いたように未来は質問する。

「ところで、六個山には何があるの？」

「そう言えば、まだ説明してなかったな」

「うん、聞いてない。奇跡の正体も、私が何をすればいいのかも……………」

速水は少女から視線を外すと、視線を上空に向けた。

釣られるように顔を上げた未来の視野に、スパーガーデンのエレベーターが入ってくる。

どことなくSF映画に出てくる宇宙基地を連想させるエレベーターの上には、漆黒の夜空が広がっていた。

「流れ星だ」

夜空を見上げたまま速水が、少年のように瞳を輝かせて言った。

「流れ星？」

「とんでもなくデッカイ流れ星がやってくるんだ……ハレーすい星なんか目じゃないくらい」

おうむ返しに問う未来に、速水は大きく手を広げてその大きさを説明する。

「でも、そんなのテレビでやってなかったわ」

そんな大規模な彗星ならとっくに見つかっているはずだし、ニュースでも取り上げるはずだった。

「だから奇跡なんだよ」

疑問の表情を浮かべるに未来に『自分たちだけの秘密』と言わんばかりに、悪戯っぽい笑みで答えた。

「その流れ星が来るとどうなるの？」

「楠は流れ星を見たら、まず何をする？」

「えっと、私なら……」

逆に質問された未来は思案すると、子供の頃に聞かされた童話の中に答えを見つけた。

「願い事かな……あッ」

そこまでを言葉にした未来は、速水が何をしようとしているのかを察した。

「まあ、そういうことだ。流れ星が出ている間に願いが通じれば……」

「速水君は助かるっていうことね？」

「簡単に言えばそうなる。その流れ星はとんでもないパワーがあって、かなりの確率で願い事が叶うらしい」

ふたりの間に芽生えた共通の希望に、手を取り合って喜びたい気分だった。

「でも、どうして私の力が必要になるの？ 流れ星に願うだけなら一人でも……」

「それがそう簡単にはいかないんだ」

速水は溜息をつく、やれやれ……と言いたげに小さく首を振った。

「やっかいなことに流れ星っていうのは、願いをかけた本人の利益になるような願いは叶えてくれない」

「本人の利益って……？」

「つまり自分のために願いはかけられないってこと。上手いことできてるだろ？」

「魔法使いが、自分のために魔法をかけられないのと同じね」

「まあ、そんなところかな」

少しずれているような気もしたが、速水はあえて指摘せずに続けた。

「だから、誰かが俺のために願いごとをしてくれないと、俺は助からないっていうこと」

「その誰かが私ってこと？」

「そういうことになる」

自らを指さす未来に、速水は大きく頷き肯定した。

明瞭な答えではあったが、未来は少し釈然としなかった。

速水のために願いごとをするだけなら、自分である必要はないのではないだろうか……

たとえば彼の両親や、仲のいい友達でも構わないわけで、何故自分に白羽の矢が当たったのか？

疑問に思ったが口には出さなかった。自分がその大役選ばれたことで芽生えた使命感に水を差したくなかったのだ。

「じゃあ、もし速水君が私のために何かを願えば、私の願いも叶うっていうこと？」

「理論的にはそうなる。でも……」

「でも？」

「願い事は生きている人間でないと駄目なんだ。知っての通り俺の本体は病院にいるわけで、ここにいる俺は屍同然の扱いだ。だからまあ願いは無効になるだろうな」

少し申し訳さなそうに速水は説明した。

「なんか不公平ね」

未来は拗ねたよう不満の声を上げる。

「せっかくのクリスマスを犠牲にしたのに、願いごとの一つも叶わないなんて」

「楠の願いごとって？」

「さっきまで見ていたドラマの結末を知りたい。せっかくいいところだったのに……」

「DVDに撮ってないのか？」

「速水君、すぐに来いっていったじゃない！」

「確かにそうだ……悪いことをしたな」

「いいよ……どうせ結末はハッピーエンドで、愛し合う二人が結ばれるだけのことなんだから」

少し嫉妬を含んだ未来の言いまわしに、速水は思わず笑いそうになる。

「まあ、この埋め合わせは必ずする……約束するよ」

「楽しみにしてるわ」

二人は再び歩き出す。

滝道を歩き途中にある昆虫館を過ぎると、間もなく六個山に通じる山道が現れた。

山道は少し陰しく街灯もなかったので、かなり歩きづらかった。もし一人なら、間違いなくこの時間に来ることはなかっただろう。木々の間から今にも何かが出てきそうな雰囲気で、言いようのない恐怖を感じる。

が、隣にいる速水自身が霊であることに気がつく、不思議と怖さは和らいでいった。

勾配が徐々にきつくなってくると、未来は歩みが少しづつ遅くなってくる。

未来の呼吸が荒くなってきたのを察すると、速水が不意に立ちどまる。

「大丈夫か？ しんどくなったら言うんだぞ」

「ありがとう、平気よ。速水君は大丈夫なの？」

「俺は今、霊の状態だから疲れなんて感じないんだ。だから俺のペースに合わせていると、大変なことになるぞ」

「そうだったんだ、それで全然息が上がってないのね」

納得したようにそう言うと、未来は白旗を上げた。

「じゃあ、少しだけ休ませて。本当はかなりハードだったの」

未来の呼吸が落ち着くまでの間、その場で休憩をする。

「でも、どうして江坂になんて行ってたの？」

未来は何気に速水に質問していた。未来の知ってる限り、速水の家は箕面から3駅程のところにある石橋だったはず。

江坂とはかなり距離があるし、通学定期では間違いなく江坂に行くことはできない。

だから、速水が江坂で事故に巻き込まれたことに、疑問を感じたのだ。

「ちょっとした用事があったな。出かけてたんだ」

少し言い辛そうにする速水の態度が怪しく、未来はさらに問いつめる。

「用事？ それってひよつとして……」

「ひよつとして、なんだ？」

「大切な人に会いに行ってたんじゃないの？ 今日はクリスマスだし」

「なんだ、嫉妬してるのか？」

「そんなじゃないよ！」

からかうような速水の言い回しに、未来はちよつとむきになって口を尖らす。

「純粹な好奇心よ。江坂に何かあるのかなって、そう思っただけよ」

「そのへんは個人情報ということ……」

「ずるいよ、さっきは私に聞いたくせに」

誘導尋問に引っかけられない速水に、ちよつと拗ねてみせる。

不満の瞳で睨みつける少女に根負けしたのか、速水はやれやれと言うように溜息をついた。

「まあ、隠すようなことでもないし、いっか」

速水は顎を掻いて少し考えると、あっさりと江坂行きの目的を答えた。

「熊を探しに行ってたんだよ」

「熊？」

「そう、どうしても熊を見つけないきゃいけなかったんだ。さ、これで正直に話したぞ」

速水はそう言うのと休憩は終わり、と言わんばかりに足早に勾配を登っていった。

「な、何？ 余計にわかんないよ。熊って何？ ちよつと、そんなに先に行かないでよ」

未来は慌てて速水の後を追った。

Scene 4

どれくらい山道を歩いたのだろうか……

時間にして30分ほどであろうか——勾配がきつかったこともあり、未来にはとても長い道のりに思えた。

高度が上がるほど寒く、吐く息は白くなっていたが、体を動かしているおかげでそれほど寒さは感じなかった。

「頑張れ、もうすぐだから」

「うん、大丈夫」

死を目前にしている速水から励まされるのは複雑な気分だったが、その励ましは不思議と未来の気持ちを楽にさせる。

未来は『ありがとう』の微笑みを返すと、それに呼応するように速水も笑みを浮かべた。

息を切らせながら木々を抜けると、一気に視野が広がった。

山道が終わりを告げ、展望台にたどり着いたのだ。

「きれい……」

眼下に広がる一面の夜景に、思わず声をあげた。

まるで光の海が広がっているように、無数のネオンが散りばめられていた。

さっきまで自分達がいた駅前、その向こうに万博公園の太陽の塔がライトアップされていて……さらに遠くには梅田の高層ビル達が無限の光で彩られ、幻想的な絵画を見ているようだった。

「でも……」

敷き詰められた光を見下ろす未来に不安がよぎる。

「こんなに光があったら、流れ星が見えないんじゃない……」

空気が澄んでいるおかげで、展望台からはかなりの星が見えた。

でも、流れ星は街の光が届かない本当の山奥とか、そういう場所で見えないと、以前に本で読んだ記憶がある。

「大丈夫、もう少ししたら本物のプラネタリウムが始まるから」

「本物のプラネタリウムって？」

疑問の瞳で見上げる未来に笑みを浮かべると、速水は腕時計に視線を落とした。

「もうちょっと待って、あともう少し……」

腕時計の時間を確認し、満足そうに一つ頷くとプラネタリウムへのカウントダウンを始めた。

「10、9、8、7……」

悪戯を仕掛けた子供のように楽しげな表情を浮かべ、速水はカウントダウンを続ける。

未来が神妙な表情で見守る中、カウントダウンは続き、刻一刻と運命の時へと近づいていく。

そしてついに、速水の口から最後の数字が告げられた。

「ゼロっ！」

次の瞬間――

魔法にかかったように漆黒が訪れた。

正確には眼下に広がっていた光という光が、一斉に消えてしまったのだ。

「これって……？」

「停電だよ。変電所のトラブルで今から約37分間、大阪一帯は文明の恩恵から見放されてしまう」

吸い込まれそうな眼下の暗闇を見ながら、速水は説明した。

「全部、速水君がやったの？」

「まさか……これはごく普通の停電だよ、ひとりの人間にできる芸当じゃない。俺はただ、それが起こる時間を教えてもらっただけ」

「教えてもらったって、誰に？」

「それは企業秘密」

速水が片目をつむってみせる。

「何よそれー」

「さ、プラネタリウムの開演だ」

不満の瞳を向ける未来に芝居がかったような声でそう言うと、速

水はマジシャンのように両手を天空に差しだした。

その手の導かれるままに未来は夜空に目をやった。

夜空を埋め尽くす満天の星に、未来は思わず感嘆の吐息をつく。

「凄い……星がいっぱい」

天の光はすべて星であった――150億光年のスクリーンにはオリオン、カシオペアといったギリシア神話から、名も無き一輪の星まで余すことなく描かれていた。

押しつぶされそうな星達の重たさに圧倒され、未来は言葉を失ってしまう。

「前に行ったプラネタリウムより全然凄いよ……」

「当たり前だ、これは本物なんだから」

「こんなにいっぱい星を見たの、初めて……」

「これなら流れ星が見えるだろ？」

「うん……」

得意げな表情を見せる速水に頷くと、自然と彼の方に身体を寄せていた。

少女の行動が想定外だったのか、速水は少し驚いたように未来を見る。

「あ、迷惑だった？」

「ぜ、全然、そんなこと無い。むしろ大歓迎というか……」

慌てふためく速水のリアクションがちょっと面白くもあり、可愛くもあった。

「じゃあ、もう少しこのままでいさせて」

未来は心のままにそう言うと、そっと速水にもたれかかった。

寄せ合った身体の温もりに、未来は心地よさそうに目を細める。

急に大胆になった少女とは対照的に、速水は戸惑いを見せていた。自分がどういう行動に出ればいいのかわからずに顎を掻くと、恐る恐る未来の肩に手をまわした。

未来はそれを拒むこともなく、少し恥ずかしそうに頬を赤らめる。

「温かいな」

「うん……」

お互いが次に何を話したらいいのかわからずに、二人はそのまま沈黙する。

「不思議ね、速水君とはあんまり話したこと無いのに……」

「確かに……でも、俺はずっと話したかったんだぜ、楠と」

「そうなの？」

意外とも思える速水の言葉に、未来は驚きを隠さなかった。

「でも、あまりそんな雰囲気無かったし……」

「何度か喋ったことあるだろ？」

「うん、速水君、いつも笑顔で私の話を聞いてくれて、ちょっと心地良かった」

「ほんとか？」

驚きと嬉しさを半々に、速水は確かめるように未来に問う。

「うん……だから私、ずっと喋ってたでしょ？」

「ずっと喋ってたな、よくもそんなに言葉が出てくるなっていうくらいにね。でも……」

「でも？」

「俺はずっとテンパってたんだぜ」

「どうして？」

「何か気のきいたことを言わなきゃって思って……でも、そう思えば思うほど、何を話していいかわからなくて、下手なこと口にして地雷踏んで嫌われるのも嫌だったから、聞く側に回ってたんだ」
「そうだったんだ。全然気がつかなかった」

「見かけによらないだろ？」

「見かけによらないわね」

二人はお互いの顔を見て笑い合う。

自分に見せていた笑顔の秘密を知ったことで、ずいぶん速水との距離が近くなったような気がした。

それと同時に、もっと彼のことを知りたいと思うようになっていた。

「なあ、クリスマス座って知ってるか？」

少し照れくさくなったのか、速水が未来から視線を外すと、夜空を見上げて質問した。

「クリスマス座？ はじめて聞いたわ」

「あの辺かな……肉眼ではちよつと見えないかもしれないけど、ちゃんとあるんだ」

「どこにあるの？」

西の方角にある星のきらめきを指差すと、速水は目を凝らしてその星座を探そうとする。

「婆ちゃんとの田舎に天文台があつて、そのでっかい望遠鏡からだに見えるんだ。本当にクリスマスツリーみたいに見えるんだぜ」

「どう、見つかりそう？」

「駄目だ……マイナーで小さいから、無理っぽい」

速水は星の搜索を断念すると、少し落胆したように溜息をついた。

「残念、私も見てみたかった。せつかくのクリスマスなのにね……」

そこまでを言葉にした未来が、ふと思いついたように瞳を輝かす。

「ねえ、だったら見に連れて行ってよ」

「連れて行ってって？」

「速水君のお婆ちゃんのところへ行けば、見れるんでしょ？」

「まあ、な……」

「じゃあ決定ね！ さっき埋め合わせはするって約束したでしょ？ それで貸し借りは無しにしてあげる」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、未来は有無を言わずに押し切ろうとした。

当然、その提案に乗ってくるものと疑いもしなかった未来は、期待に満ちた瞳で彼の返答を待った。

が、速水はその瞳から逃げるように視線を外すと、さっきまで光に満ちていた街並みの方を見下ろす。

「速水君……？」

——何か気に障るようなことを言ったのかな……？

不意に沈黙した速水の横顔を見ながら、未来は少し不安になる。気まずい雰囲気の中、次の言葉を探そうとするが、先に口を開いたのは速水の方であった。

「嘘だよ……」

速水は暗闇を見つめたまま、ぽつりと呟いた。

「嘘って？」

「流れ星の話……そんなものは最初から無かったんだ」
不安げに問う未来に、落ち着いた口調で速水が答える。

「無かったって、どういうこと？」

「流れ星の話は全部嘘ってこと、俺が適当に考えて作った……だからいくら待っても流れ星なんて来ないし、奇跡も起きない」

その言葉の意味が理解できずに、未来はただぽかんと焦点の合わない視線で速水を見つめた。

「大体、そんなうまい話があるわけねーだろ。ここに俺がいることさえも奇跡なんだから。これ以上奇跡が続いたら……それこそお前が夢中になっていた、安物のドラマみたいになってしまう」

未来に対する罪悪感からか、速水は矢継ぎ早に言葉を並べた。

「どうして、そんな嘘をついたの……？」

信じられぬといったげに、未来はかすれた声で問う。

「一緒にいたかったからだよ、お前と」

真剣な眼差しで未来を見ると、速水は全てを曝け出すように続けた。

「一分でも長くお前と一緒に時間を過ごしたかった。最初からそのつもりだった……お前と笑い合って、向こうの世界に行くことが俺の最後の希望だったんだ」

「それで嘘をついたっていうの？」

「最初から俺が死ぬってわかっていたら、一緒に来てくれたか？」

「それは……」

速水の質問は的確で、未来は言葉を詰まらせてしまう。

彼の指摘するように、初めから希望が無いとわかっていたら、未来はきつと、ここには来なかっただろう。

「ずるいよ、そんなの……」

未来は声を震わせ、速水を非難する。

「嘘をついたことは確かに……」

「そうじゃない！」

速水の言葉を掻き消すように激しく首を振った。

「楠……」

「じゃあ、どうして最後まで嘘をつき通してくれなかったのよ？」
込み上げる感情を抑えること無く、声を荒げて責め立てた。

気づかぬうちに涙があふれ、頬を伝っていた。

「最後まで嘘をつき通してくれたら、こんなに悲しい思いしなくてすんだのに……」

両手のこぶしを握りしめ、未来は弱々しく訴えた。

「お前に嘘をついたまま行くのが嫌だった」

必死に涙をこらえようとしている未来に、速水は穏やかな声で答えた。

「騙しておきながら言っても説得力無いけど、お前にだけは、ちゃんと本当のことを言っておきたかった……」

「私に、だけ……？」

未来の目を真っすぐに見ながら頷くと、速水は小さく微笑みでみせた。

「俺、ずっとお前のことが気になってたんだ。入学してからずっとだぜ……」

楽しい思い出を語るように、速水は遠い目を星空に向ける。

「完全な片想いっていうか、でもそういうの意識し出すと、何も動き出せなくなってしまうって……」

「全然知らなかった……」

「そりゃそうだ。俺が一方的に熱を上げてただけだからな」

頬を赤らめる未来にフォローを入れると、速水は続けた。

「このままじゃ何も動かないって思って、それで覚悟を決めてクリスマス之夜に告白しようって決めてたんだ。お前の仲のいい友達に携帯の番号も聞いた……」

「それで私の携帯番号を？ 誰に聞いたの？」

「本人の希望で名前は非公開だけど……俺が素直に事情を話したら、マクドナルド3日分という条件で快く教えてくれた」

「全然、快くじゃないような気もするけど……」

「プレゼントも渡そうと思って、人生初の労働ってやつも体験した。それでお金を貯めて今日、東急ハンズに探しに行ってたんだ」

「東急ハンズ……」

未来はその言葉に引っかかりを感じて反芻するが、速水は構わずに続けた。

「テディ・ベアのぬいぐるみさ。その情報提供者が、お前がテディ・ベア好きだって教えてくれたんだ」

「それでさっき、熊探しって言ってたのね」

「その通り」

『良く出来ました』と言わんばかりに、速水が無邪気に笑う。

未来も釣られて笑おうと思ったが、ふと弾かれたように重大なことに気がつく。

「ね、ねえ、ひょっとして電車の事故ってその時に……？」

東急ハンズが、電車の事故が起こった江坂にあることを思い出したのだ。

「慣れないことをするもんじゃねーな、まったく」

まるで他人ごとのようにそう言うと、速水は頭を掻いてみせた。

「でもさ、このままじゃ死んでも死に切れないからって……それで、ここへ来ることを許されたんだ」

それまでの戯けた表情を閉じ込めると、速水は真剣な眼差しを未来を向けていた。

「だから、ちゃんと気持ちを伝えたい」

「速水君……」

未来は拒むことなく、今から発せられる速水の一言一句を受け止めようと覚悟を決める。

速水は緊張に表情を強張らせながらも、偽りの無い素直な心を解放させた。

「俺、お前のことが、ずっと好きだった」

生まれて初めての告白を受けた未来は、不安そうに自分を見る速水に小さく微笑みかける。

「私、速水君がそんなふうに使ってくれてること、全然気がつかなかった……でも、今夜ずっと一緒にいて、自分の気持ちに気がついたの」

「気持ち？」

「うん……最初はあなたを助けるために、よくわからないまま一緒に来たんだけど、今は違う……ずっと一緒にいられたらいいなって、さっきは本当に思ってた。そんな気持ちになったの初めてだよ。だから……」

湧きあがる想いを上手く説明できそうになかった未来は、心にある全てを口にする、最後に一番伝えたい大切な一言をはっきりと言葉にした。

「私も速水君のことが好き」

緊張に息を飲み込んでいた速水が、ほっとしたように息を吐き出す。

「これでめでたく両想いだな、俺達」

「そうね……」

「だったら、そんな悲しい顔するなよ」

「だって、だって……」

笑顔で喜ぶ速水とは対照的に、未来は泣きだしそうになっていた。速水の体がどんどん透けて、闇の中に消えていきそうになっていたのだ。

「もう本体の方が限界みたいだな、でもまだ少し時間はあるから」

「でも、消えちゃうことに変わりはないんでしょ？」

それに答える代わりに、速水は寂しげに笑った。

「なあ、ひとつお願いがあるんだ。お前にしかできないお願いだ……」

「何……？」

「最後は笑顔で見送って欲しい……」

「無理だよ、そんなの」

未来は即座に否定する。

溢れ出す涙をこらえることもできないのに、どうやって笑えというのか……

「俺はお前の笑ってる顔が好きなんだ。向日葵みたいに元気で、回りをも明るくさせるお前の笑顔が……」

速水は未来の視線の高さまで腰を屈めると、少女の頬を優しく撫でた。

「でも……」

細くて繊細な速水の指が頬に触れる。とても温かった。

その愛撫は、速水の存在そのもののように心地良く、未来は思わず目を細めてしまいそうになる。

頬を撫でていた指先が不意に矛先を変えようと、未来の首元の敏感な部分をくすぐる。

未来はくすぐったさに思わず笑ってしまう。

「ほら、いい笑顔だ」

「そんなのずるいよ」

未来は口を尖らすと、パワープレイで笑顔をこじ開けた速水を非難した。

でも不思議なことにもう涙は流れてこなかった。魔法にかかったように悲しみが成りを潜め、気付かぬうちに笑顔を浮かべていた。

「そう、それでいい」

速水は満足げに頷くと、未来に向かって人差し指を立てる。

「あともうひとつ、リクエストがあるんだ」

「リクエスト……？」

「今夜はクリスマスなんだぜ、せっかく両想いになれたのになのに、俺達は聖夜を飾るに相応しいことを何もしていない」

確かに言う通りであった。ずっと忘れていたが、今はクリスマスの真っ最中で、恋人達はそれぞれの形でクリスマスのイベントを楽しんでいるはずであった。

「でも、クリスマスらしいことって何なの？」

「クリスマスの歌、何でもいいから歌ってくれよ」

「私が？」

「他に誰がいる？」

「今から？」

「今じゃなきゃいつなんだ？」

「でも、私クリスマスの歌なんか知らないよ……」

「知ってるやつならなんでもいい。楽しい気分になれる歌、歌ってくれ」

「急にそんなこと言われても……」

元々人前で歌うことが苦手な上に、ヒットチャートを賑やかす歌を殆んど知らない未来にとって、そのリクエストは決して低いハードルでは無かった。

「わかったわ……歌ってみる」

未来は覚悟を決めると、どんな歌が飛び出すかと好奇心の目で見ている速水に向かって、静かに歌い出した。

清し この夜 星は光り

救いの御子は 馬槽の中に

眠り給う いと安く

未来は誰もが知っている『きよしこの夜』を選んでいた。

自分でも良く覚えていたな……と思うほど自然に歌詞が口をついて出てくると、大切な存在のために歌い続けた

夜空の星たちに届くほど歌声は透き通り、たったひとりの観客の心にも響き渡る。

星明かりに浮かび上がる少女の姿は純粹で、とても美しかった。消えゆく運命であることを忘れ、速水は我を忘れたように少女に見惚れる。

懸命に歌い続ける未来であつたが、もう限界であつた。

魔法が切れてしまったように悲しみが込み上げ、歌声が涙声に支配される。

「駄目……やっぱりこんな気持ちじゃ歌えないよ」

速水がいくら笑顔を望もうと、少女はもうそれに応えることはできなかった。

そんな未来に近づくと、速水はそつと小さな身体を抱きしめていた。

「ありがたいな、無理を聞いてくれて……」

速水の身体は完全に向こうが見えるくらいに透けていたが、不意に淡い光を放ち出すと、僅かにではあつたが透過率を持ち直した。

「速水君……？」

「本体の方が最後の力を振り絞つてるみたいだ。ローソクの明かりが最後に明るくなるみたいにな」

速水は抱きしめる腕に力を込める。未来の温もりを忘れないように……

「本当に楽しかった、人生で最高のクリスマスだった」

胸の中の未来に精いっぱい感謝の気持ちを伝えたと、そつと少女から腕を外した。

「そろそろ時間が来たみたいだから俺、行くわ」

「速水君……」

強い意思に満ちた眼差しで速水を見上げると、未来は静かに瞳を閉じる。

「楠……」

少女が何を求めているのかは瞬時に理解できた。

速水はもう一度未来の身体を抱き寄せると少しの躊躇い後——彼女のおでこにそっと口づけをした。

「それは、ちゃんと生きているやつのために取っておくんだ」
何故？ という瞳で見上げる未来にそう答えると、速水は小さな子供にやるように、少女の頭をくしゃくしゃと撫でた。

そして消えゆく最後の力を振り絞って、速水は一番の笑顔で未来に別れを告げた。

「じゃあな」

その言葉を最後に、速水の姿は完全に消えてしまった。
未来の周りからすべての音が消えたように静寂が訪れる。

「そんな……」

ぽつんとひとり展望台に取り残された未来は、それが無駄であることを知りながらも速水の姿を探した。

だが、どこにも速水の姿を見つけることができなかった。

「速水君……」

未来が寂しげに夜空を見上げたその時——
夜空に大きな一筋の流れ星が流れていた。

「嘘……」

どんな凶鑑、ニュースでも見たことがないくらい流れ星は大きかった。

未来は感嘆の吐息をつく、夜空をゆっくりと流れていく流れ星の姿を目で追いかけた。

『とんでもなくデカイ流れ星がやってくるんだ……ハレーすい星なんか目じゃないくらい』

速水が瞳を輝かせて言ったように、流れ星は夜空の一面に君臨していた。

未来が見守る中、流れ星はしばらく夜空にその身を置き続けたが……その役目を終えると、星たちの海の中へと消えていった。

「遅いよ……」

未来は消えていった流れ星に不満を漏らすと、誰に構うこともなく思いきり泣きだした。

悔しさに嗚咽を噛みしめると、子供のように大声を上げ、消えていった速水の名を何度も何度も叫び続けた。

Scene 5

山道を登り切った未来が一息つくつと、眼下に広がる街並みを見下ろした。

抜けるような真つ青な空には雲ひとつなく、銀色の太陽がとても眩しい。

新緑の木々はその陽光を受けて、生命の輝きに満ちていた。

前に来たときは寒くて震えそうだったが、今はとても温かくて心地良く、それが故にあの夜から随分と時間が経過したことを実感する。

あの聖夜の大事件から数か月の時が過ぎていた――

未来は高校2年生になり、少しだけ背が伸びた。新しいクラスにも慣れ、友達も何人かできた。

あの夜に見た流れ星は、結局どのニュース、新聞にも載ることはなかった。

天文雑誌も何冊か買って見たが、12月24日に巨大な彗星が落ちてきた記録はどこにも無かった。

クラスメイトにもそれとなく聞いて見たが、誰一人として彗星を見たものはいない。

でも、未来は間違いなくあの夜に彗星を見た。

それは本人だけの幻かもしれないが、たとえそれが事実でなくつても、それはもうどうでもいいことのように思えた。

――真実は自分の中だけにあればいい……

未来は思い出したように踵を返すと、山道を息を切らしながら登ってくる速水の元へと駆け寄った。

「歩くのが速いんだよ……こっちは病院から出てきたばかりなんだぜ」

「リハビリを兼ねてここに来たいって言ったのは、速水君でしょ？」

「そりゃあそうだけだよ……こんなに体力使うなんて想像もしなかった」

額に汗をかきながら、速水は大きく肩で呼吸を整えていた。

「あの時は本体じゃ無かったもんね。でも、これが生きてるっていう証よ」

未来は嬉しげにそう言った。

「確かにそうだけど……本体の方の劣化が激しすぎる」

「生霊の方が良かった？」

「自分の身体がいつ消えるかって怯えるのは、もうたくさんだよ」

「怯える？ 人には散々笑えって言ったのに、本当は怖かったんだ」

「あの時は無理してただけだよ……お前がいてくれなかったら、恐怖でとっくにおかしくなっていた」

「見かけによらないわね」

「見かけによらないだろう？」

お互いの顔を見て笑い合う。

二人は肩を並べると、眼下に広がる大阪の風景をぼんやりと眺めた。

「でも、どうして俺を生かしてくれたのかな？ これじゃあ本当に安物のドラマみたいだ」

「いいんじゃない、ハッピーエンドって私は好きよ……」

「まあ助けてもらって、文句が言える立場じゃないんだけど」

「流れ星に感謝しなきゃね」

「まあな……こうやってまた一緒にいられるんだからな」

未来はあの夜見た壮大な天体ショーを思い出していた。

速水が助かった原因は今もって不明だった……流れ星は速水が消えたあとに現れたし、未来自身が願いをかけたわけでもない。

搬送先のICUでも手の施しようがなく、一度は速水の生命反応は完全に停止した。

だが、そのあとに速水は奇跡的に息を吹き返した。それは科学的

にはありえないことだったが、速水がこうして目の前にいるのは紛れもない事実である。

難しく理由付けするより、あるがままの事実を受けとめて感謝すればいい……

未来の中でそう結論は出ているのだが、彼女なりの推測はこうだった。

速水の姿が完全に未来の前から消えてしまった後も、彼の命の炎は完全には消えていなかった。

それが彼自身の生に対する執着心だったのか、未来の呼びかけだったのかはわからない……

そこへ本当に流れ星が現れてしまったために『奇跡』と呼ばれる現象が起こったのだ。

ギリギリセーフ……都合良く解釈するなら、そんなところだろう。

「そのでっかい流れ星、俺も見えたかったな」

「また今年、見れるかもしれないよ」

「その時は、真っ先にお前の願いをかなえさせてもらう」

「私はいいよ……」

「どうして？」

「願いはもうかなったし、速水君だってそばにいる。これ以上何かを望んだら、きつとばちがあたるわ」

「そっか……」

速水は未来の身体を引き寄せると、そっと抱きしめた。

未来は速水の胸に顔を押し付けると、その温もりを心おきなく確かめた。

「あの時の夜みたいだね」

「ああ、あの時は途中で終わってしまったけど……」

速水はそっと顔を寄せると、未来にキスをしようとした。

が、未来はしっかりと手のひらでそれをブロックする。

「生きてるやつのために、とっておけて言ったでしょ？」

「だから、ちゃんと生きて戻ってきたんですけど……」

「ダメ、ファーストキスはクリスマスまでお預けよ。あの夜の続きは、ちゃんともう一度やり直さなきゃいけないの。本体の方のあなたと」

未来は小さな子供を叱りつけるように言った。

「物には順序があるの。ちゃんとクリスマスをやり直さなきゃ、二人の時間は始まらないんだからね。キスだってしてあげない」

「わかったよ……」

しぶしぶと速水は納得する。

確かに未来の言うことにも一理はある。ようやくお互いの気持ちがひとつになったのだから、何も焦ることはない。

ひとつひとつ、二人でゆっくりと育てていけばいい……

「それとあとひとつ」

「何だ、まだあるのかよ？」

「今年は速水君にも歌ってもらうからね」

「歌うって……ひよっとして？」

「『きよしこの夜』よ。あんな悲しい気持ちで歌うのは二度と嫌……トラウマになっちゃうよ」

「わかった、それも含めて最初からやり直そう」

「今年は二人で楽しく歌うの。ううん、来年も再来年もずっと……」

「じゃあ俺はこの先の一生、毎年その歌を歌わされることになりそうだ」

「私は全然構わないんだけど……」

「俺だって大歓迎だ」

二人はお互いの顔を見合わせて笑い合った。

「大好きよ」

未来は、そっと速水の頬にキスをした。

速水は少し照れくさそうに笑みを零す。

そんな二人を祝福するように初夏の太陽が輝くと、二人の未来に希望の光を投げかけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7812z/>

魔法のほうき星

2011年12月25日04時54分発行